

NEW CROWN

小中の接続の基本方針

新学習指導要領では、小学校における外国語活動では「コミュニケーション能力の素地」（「素地」とはコミュニケーションに対する関心・意欲に結びつく概念）を、中学校における外国語科（英語）では「コミュニケーション能力の基礎」を養う、とある。「基礎」を身につけるためには、生徒にコミュニケーションへの意欲を持ち続けさせることに心がけなければならない。小学校外国語活動は「教科」ではなく、道徳と同じ領域である。「～することができる」（単語が言える、表現を使える、書けるなど）という評価規準はない。地域間・学校間・クラス間での指導のばらつきもあるので、「音」の入り具合、英語への興味（好き嫌い）などに差があり、さまざまな子どもが中学校に上がってくる。このような状況を踏まえ、文字（アルファベットなどペンマンシップ的な指導など）、語彙や文法を、無理なくわかり（習得し）、多くの人と実際にふれあいながら、英語学習がコミュニケーションに欠かせないことばの学習であることを実感させてあげる必要がある。

1. 接続期—入門期（Get Ready, LESSON 1～3）の大きな特徴

- ①小学校外国語活動のふりかえりができる、ゼロからのスタートをすることもできる。（Get Ready）
- ②音から文字へ、無理なく、スムーズな移行ができる。（Get Ready 3, 4, LESSON 1～3 のリスニングと本文の関係）
- ③4 技能のバランスをとることができる。（LESSON 1 から 3 の構成）

2. 中学校の英語教科書の最初のコーナーGet Ready 1—「場面とはたらき」

*NEW CROWN*では、「場面とはたらき（機能）」を最初に配置した。小学校外国語活動と中学校英語の学習指導要領において、共通事項に「場面とはたらき」がある。Get Ready1 は、小学校と中学校をつなぐところであり、中学校3年間のはじまりであり、さらに言えば高校までつながる6年間の英語科としてのはじまりでもある。

Get Ready 1「コミュニケーションを楽しもう」は、『英語ノート』で紹介された「あいさつ」「道案内」「買い物」「気持ちを伝える」「事実を伝える」などの場面や言語の働きを取り上げ、実際に話される英語を聞きながら、視覚を通して場面を考える活動である。生徒たちは、小学校で体験した英語表現を思い出し、イラストを見ながら英語が実際のコミュニケーションの手段として使われていることを実感することができる。また教師は、「どんな言い方をしていたかな？」「どんな単語が聞き取れたかな？」などと質問しながら、生徒がどの程度英語の表現や語彙を知っているのかを把握することができ、以後の指導方針を立てることに役立つようになっている。

3. 本課（LESSON）に入る前までの単語の扱い

Get Ready の中に出てくる単語は、学習対象語にしていない。*NEW CROWN*は、小学校外国語活動用教材『英語ノート』（文部科学省）に登場した単語や表現を多く扱っているが、小学校の外国語活動を観察していると、耳にした英語を上手に繰り返す児童がいる。一方で、あまり正確な発音が指導されていない場合も見られる。まずは、英語の単語や表現を知っていることを認めてあげることが大切である。その上で、より正しい発音を身につければ相手にメッセージを正確に伝えられると励ましながら発音指導を行う。

4. 文字指導

*NEW CROWN*は、書くことの段階的な指導を明確に取り入れている。アルファベットを書く段階からまとまりのある文章を書く段階まで、LESSON 3の終了時まで配列している。

- ①アルファベット（大文字・小文字）を書く。（Get Ready 3）
- ②単語のスペリングに慣れ、文字と音に関係があることに気づく（Get Ready 4）
- ③自分の名前を紹介する文を書くなど、教科書本文を参考にしながら、一文レベルの英語を書く（LESSON 1）。
- ④会話文を完成させる（LESSON 2）。
- ⑤自己紹介文を書く（LESSON 3 Mini-Project）。

『英語ノート』には、アルファベットのいくつかを書いたり、単語を書き写したりする活動があるが、体系的に学んでいるわけではない。中学校では、書くことの指導を丁寧に行っていくことが必要である。外国語活動を通して、文字では書けないが、単語や表現の音声には慣れ親しんでいる。無理なく「文字」→「単語」→「文」→「文章」と段階を踏む指導を心がけることがポイントとなる。

5. 本課の導入

*NEW CROWN*の LESSON 1～3 は、リスニング「聞いてみよう」からはじめ、「意味の理解」から「文法・文構造の理解」へと指導できる。

「聞いて意味を理解すること」からスタートする。①「聞いてみよう」（3つの会話）を一度聞いたあと、②下にあるポイント文（文構造）をおさえた上で、③もう一度「聞いてみよう」を聞く（小学校外国語活動とは異なる学び（文法）を体験する）。④そして「聞いてみよう」音声の1つが文字化された本文を読んだりしながら、詳細部分を意識させる。⑤その上で、「聞いてみよう」の音声を聞かせる。このように、「意味の理解」から「文法・文構造の理解」へと指導できるような教科書構成になっている。

外国語活動では、『英語ノート』の音声やALTの話などを通して、まとまりのある英語を聞く機会も多くある。児童は英語の意味を大まかに理解することに慣れている。中学校では、外国語活動で培った聞く力を踏まえて、「意味を大まかに理解する」ことからスタートし、「詳細部分を意識しながら聞く」ことへ発展させ、文法・文構造の理解へつなげることが無理のない展開と言える。

6. 本文

*NEW CROWN*の LESSON では、コミュニケーションを円滑にする内容になっている（コミュニケーションストラテジー）。小学校で経験してきた自己紹介のやりとりを発展させて、英語で他者とかわる方法を具体的に学んでもらいたいと考えている。

たとえば、『英語ノート』Ken と Mai のやりとりのように、児童はクラスメートとのインタビュー活動を行う。

Ken: Hello. My name is Ken.

Mai: Hi. My name is Mai.

Ken: Nice to meet you.

Mai: Nice to meet you too.

中学校ではどのようなことに留意すればよいだろうか。*NEW CROWN* Book 1 の LESSON 1 本文では、次のように小学校とは一歩進んだ内容になっている。

Kumi: Hello, I am Tanaka Kumi.

Paul: Excuse me?

Kumi: Kumi. K-U-M-I.

Paul: Kumi, I am Paul. Paul Green.

Kumi: Nice to meet you, Paul.

Paul: Nice to meet you too, Kumi.

Kumi はスペリングを言うことによって、正しく名前の言い方を伝えている。それだけでなく、Kumi と Paul のやりとりは、次のような特徴を持っている。

- ①聞き取れないときには確認する (Excuse me?)。黙ったまま、やり過ぎさない。
- ②相手の表現を繰り返すことで理解したことを示す (Kumi, I am Paul. と応答する)。
- ③Paul は Kumi という名前の言い方を理解したことを示している。
- ④覚えた名前を会話に用いている (Nice to meet you, Paul.)。これは、コミュニケーションを円滑にする 1 つの特徴である。